世界遺産・観光・宗教

——キリシタンをめぐって交差するまなざし

松井圭介（まつい けいすけ）

一　はじめに

ポスト工業化社会を迎えた二一世紀において、観光は最有力産業と目されている。先進諸国では、所得の安定や生活水準の向上、余暇を重視する価値観への転換などによるライフスタイルの変化にともない、観光・レクリエーション行動はますます重要性を高めており、同時にその形態も多様化している。インターネットに代表される通信技術の飛躍的な進歩や高速交通ネットワークの確立は、地球レベルでの「時間・空間の圧縮」をもたらし、現代人の生活は、いやおうなしにグローバリゼーションの影響にさらされているが[1]、現代における観光流動の増大は、こうした価値観やライフスタイルの変容に加えて、観光地に関する豊富な地域情報を提供するメディアの発達や観光インフラの整備に負うところが大きい。

巡礼は、居住地から離れ非日常的な場所への移動を伴う行為であり、信仰的な動機に基づいて聖地を参詣する行為であるが、一方で観光的要素も同時に重要な動機であり続けてきた。日本でも、社寺参詣は同時に名所旧跡を訪ねる観光行動的な性格を有するとともに、最新の農業知識に触れ世情を知るための貴重な機会でもあった。信仰活動としての宗教的側面と、世俗的な余暇活動としての側面は互いに親和性を保ち、巡礼の多面的な性格を構成してきた。明治神宮が毎年三〇〇〇万人もの初詣客を集めることや、浅草寺に年間三〇〇〇万人もの参詣者があることは、宗教的な聖地が信仰や習俗のみならず、余暇活動の対象としても魅力を有していることを示唆している。現代世界の諸地域において、ルルド（フランス）やサンティアゴ（スペイン）、メヂュゴリエ（クロアチア）といったカトリックの巡礼地をはじめ、ヒンドゥ教やイスラームの聖地においても巡礼者の増加がみられるが[2]、このように宗教観光は現代の観光動態を考える上でも重要な要素といえる。

観光とのかかわりから現代宗教をとらえる際に、ヘリテージ・ツーリズム（文化遺産観光）の隆盛という視点を欠かすことはできない[3]。国宝や重要文化財に指定されている宗教建造物や聖像は、国を代表する文化遺産であり、歴史や文化に関心をもつ人々にとってかけがえのないアトラクション（観光対象）となっている。こうした文化的アトラクションのなかでも特に有力な観光資源として、世界遺産が挙げられる。日本では「世界遺産ブーム」とも呼ぶべき現象が、近年とみに顕著になっており、ユネスコによる世界遺産への登録により、観光客の増加を期待する観光関連業界、地域振興の起爆剤としたい地方自治体や経済団体などの思惑もあり、世界遺産候補地を目指した動きが盛んになっている。こうした「世界遺産ブーム」の背景には、観光需要の掘り起こしを期待する地域の側だけでなく、観光者側のニーズにもみられる。団塊世代の離職期を迎えて、余暇・観光需要のさらなる高まりに加え、こうした世代は比較的経済的にゆとりがあるうえ、歴史や文化への関心が強く、学習型・教養型観光への志向がある。世界遺産は国内外の時間的・経済的なゆとりをもつ人々にとって、非常に魅力的な観光対象であり、需要と供給のバランスがとれた世界遺産観光は今後さらに市場を拡大していくものと考えられる。

日本では、二〇〇七年一二月現在、世界文化遺産として一一件が登録され、このほかに暫定登録リストに八件が記載されており、今後その数はさらに増加することが見込まれているが[4]、文化遺産として宗教が重要な意味をもつことは論をまたない。一一件の世界文化遺産のうち宗教と直接的に結びつくものが六件（「法隆寺地域の仏教建造物」「古都京都の文化財」「厳島神社」「古都奈良の文化

財」「日光の社寺」「紀伊山地の霊場と参詣道」）を占めており、この他にも「武家の古都鎌倉の寺院・神社」や「平泉の文化遺産」「富士山」などが宗教関連のものとして暫定リストに登録されている。これらの宗教にかかわる文化遺産の多くが社寺や山岳信仰を基盤とした伝統宗教であるのに対し、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下、「長崎の教会群」）がキリスト教関連として日本では初めて、二〇〇七年一月に文化遺産の暫定追加候補となった。このことは、ともすれば負の歴史の側面が強調されてきたキリスト教の信仰に対し、その普遍的価値と日本における独自性を文化遺産として評価しようとする動きであり、日本の宗教史において画期的なことといえる。

一方で、世界遺産登録によって地域が受けるマイナス的な要素も数多くの指摘がなされてきた。観光客による文化財の破損・汚損といった直接的な被害にとどまらず、[5]過剰な観光客の受け入れによる地域住民の生活環境の悪化や所得格差の拡大、観光地化による自然環境や景観の破壊、およびそれに伴う世界遺産としての価値の喪失な[6]どがその例である。加えて、世界遺産登録が持続的な地域発展に結びつくのかに関しても疑問が呈せられている。世界遺産への登録は一時的な観光客の増加はもたらすものの、直ちに急増するものではなく、むしろ一時的な観光ブームに終わりかねない危険性も指摘されている。[7]

そこで本稿では、「長崎の教会群」を事例にして、長崎県およびその一自治体である新上五島町において、カトリック教会群やいわゆるキリシタン文化と呼ばれる長崎の宗教文化がどのように観光資源化がなされているのかを検討し、カトリック教徒にとっての信仰の場としての教会や儀礼の場としての聖人殉教の地が新しい意味をもった巡礼地として再編されていく様態を検討するとともにその問題点を考えてみたい。

二　明日の世界遺産に出会う島

新上五島町は、長崎県五島列島の北部に位置し、中通島（なかどおりじま）と若松島を中心とする七つの有人島と六〇の無人島から構成されている（図1）。九州本土とは航路により佐世保港、長崎港、福岡港と結ばれており、最短の有川港

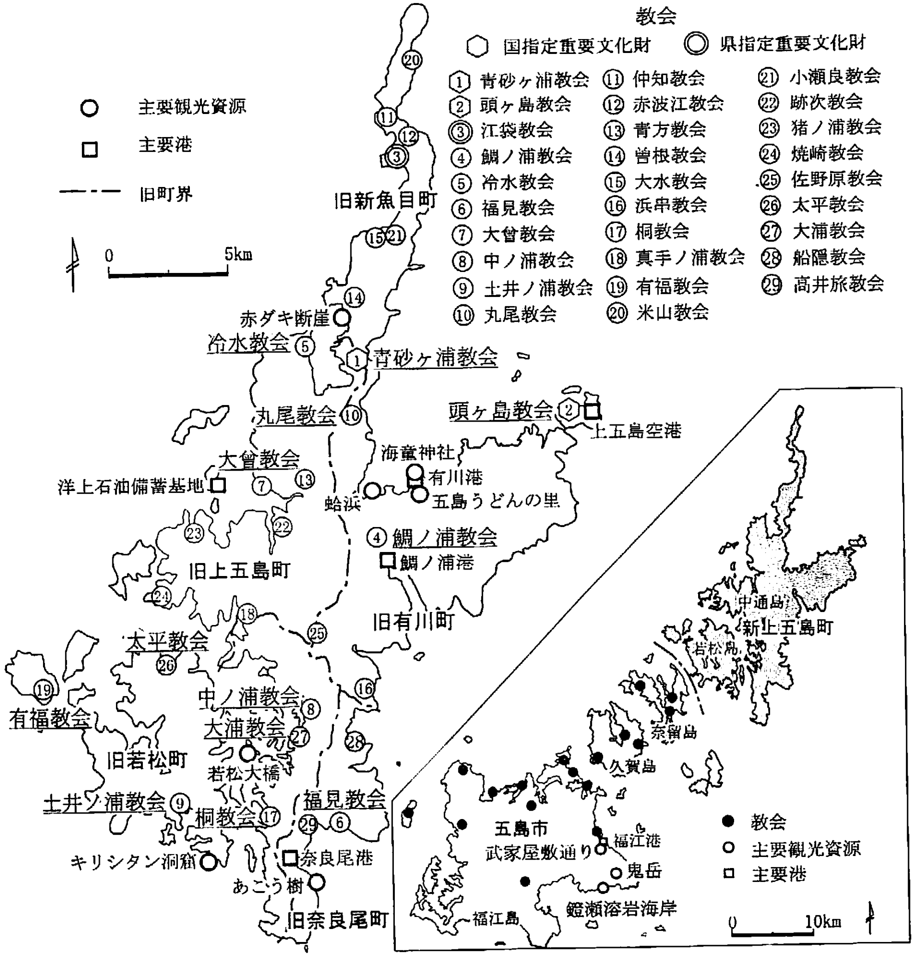

図1　新上五島町における教会群